

贈与交換論と開発援助： 研究の視座を整理する

佐藤峰

1 はじめに

開発援助¹、特に開発事業が持つ暗黙の了解に「交換原理（Aという活動を入力すると等価かそれ以上のA-という成果が出力される）」という、投資的な考え方が暗黙裡にあるが、現実にとれほど即しているのか。例えば、JICAなど国際協力機関の事業に関する記述は、「問題の分析→解決に資する投入→課題解決・他事業への波及」という三段論法が非常に多い。開発事業も、インプットとアウトプットの積み上げによるログフレームという手法で管理される²。しかし、途上国の現場経験や日々の暮らしに鑑みると、少し異なる原理で人は動いている実感を持つ。

人類学および隣接諸学において「人と社会を動かす仕組み」の理論として、広く説明枠組みとなっているのが贈与交換である。その幅は「無文字社会」から「IT社会」まで広く、「第三セクター（非営利活動）」について、特に東日本大震災の後、再度着目される議論となる。しかし「第三セクター」であろう、開発援助・開発研究には全体的な活用がない。その肯定的・否定的な側面から開発援助を見ると、現実課題理解の確度が上り、より適切な支援を構想できるのではないだろうか。これが本稿での問いである。

本稿ではまず、『贈与論（初版1925）』から現代に長く伸びる理論および研究群を、応用研究にも着目して俯瞰する。次に、開発援助における「贈与」および「交換」の扱いについて整理する。最後に、贈与交換論から開

発援助および開発研究への示唆、開発援助から贈与交換論への示唆について考察を行い、結論へと繋いでいく。

2 贈与交換論とその現在性について

この項ではまず、贈与交換論の原典であるマルセル・モースの『贈与論(1925)』における議論についてまとめる。その後、モースから現代に続く、多くの学問領域に広がる関連研究群について先行研究を行う。

2-1 『贈与論(1925)』における論点を整理する

フランスの社会学者・文化人類学者であるマルセル・モース(1872年-1950年)による『贈与論：アルカイックな社会における交換と形態の理由(1925)』の主題は、「未開社会で、贈り物に対し、返礼を義務付ける法的経済的社会的文化的規則は何か。」であり、マリノフスキーによる「クラ交換」の研究にインスピレーションを多く得ているとされる(今村2000)。そして、この全人類学的な問いに向き合うことで「現代社会以前の社会における取引の性質について、他方ではこのような道徳が社会の岩盤として未だ機能していることを示すこと」を志向している。つまりは、元々「未開社会」と呼ばれていた、現在の「途上国」について「社会の活性化の原理」について学際的に考察する、「最古の開発研究の書」としても読むことが出来よう。

表1 贈与交換の特徴 (贈与論(2014)より筆者作成)

A 定義	贈り物を行う義務、受け取る義務、返礼の義務で構成。贈与の循環が止まないのは贈り物に宿る霊力による。
B 種類	二者間での限定交換と円環する一般交換があり、社会の維持発展は後者による。
C 等価交換との違い	等価交換は両者の合意と意思に基づき、取引はその場で完結し行為の連鎖を産まない。贈与交換では贈り物は自由意志により選択できず、感情がやりとりされ、返礼は一定の時差をもってなされ、ますます貴重なものが送られあふ。
D 平和性と暴力性	贈与交換には富の再分配の側面及び信頼関係の醸成のみならず、権力の維持再生産という暴力的な側面を併せ持つ。
E 贈与できないもの	物には消費財と希少材があり、後者は貸借されても譲渡されず、擬人化(名前・人格・物語を持つ)される。

著書の要素を簡潔にまとめたものが表1である。表に基づき概要を説明したい。モースは、贈与交換を「贈り物を行う義務、受け取る義務、返礼の義務(反対給付)」からなるとした(A)。そして、その種類を二者間でのみ行われる限定交換と、三者以上からなる円環する一般交換とし、社会の維持発展は主に後者によるとする。つまり諸社会は、社会やその従属集団や成員が、どれだけ互いの関係を安定させ、与え、受け取り、お返しすることが出来るかに応じて発展したとする(B)。また、この二つの交換形態の違いを、「等価交換は両者の合意に基づく「取り引き」であり行為が完結し連鎖しないのに対して、贈与交換という「やりとり」では、「贈り物」が選択できず、返礼(反対給付)は、多くの場合贈られたものより貴重と思われるものが、一定の時間を置きなされる」こととした(C)。そして、贈与交換では、物の贈与・受領・返礼に伴い、感情の贈与・受領・返礼も行われる。これは贈り物を「気持ちを形にする」行為と言語表現されることがあることにも顕著に現れている。

しかし、モースは、贈与交換の輝かしい側面だけに光を当てていない。Dにあるように「平和性(互酬性)と暴力性(抑圧性)」の両側面を持つことも指摘している。つまり、贈与交換は富の再分配や信頼関係の醸成も行う反面、贈与を行えるものと返礼を行えないものとの間にある差異を浮き彫りにし、そのことが権力の維持や再生産に繋がるとする。そして最後に、全ての現象が贈与交換によっては説明できず、Eにあるように、社会には「決してやりとりされえない希少材」、例えば先祖代々受け継がれる「固有の文化」に繋がるものがあり、擬人化され物語を持つことも指摘する。

2-2 『贈与論』に影響を受けた研究群について

『贈与論』はその後、学術研究においては、人類学の分野ではヨーロッパではバタイユ、レヴィ・ストロース、サーリンズ、ゴドリエの研究などに広く影響を及ぼし(伊藤)、1980年代以降も、アラン・カイエ率いる「社会科学における反功利主義運動(MAUSS)に継承されていく(古市2015)。また、近年においてもアンスパック(2012)が、贈与論を悪循環(復讐)と好循環(互惠)に分け新解釈するなど現代の学術研究にも継承されている。米国では、経済学での実証研究が主流の一派のようである(Duffy

and Puzzello 2014 など)。日本においては、モースへのオマージュとして有名な岡本太郎の太陽の塔だけでなく、柳田國男「民族学」と折口信夫「古代学」の確立にも影響を及ぼすとされる（古市2009）。そして現代では、伊藤（1995）、今村（2000）、中沢（2009）、岸上（2016）らの人類学研究の基盤となっている。

一方で応用研究への引用は、人類学の領域では、欧米では贈り物とそのお返し（Sherry 1983, Caplow 1984 など）、医療や看護学では献血や臓器提供などの広義の寄付行為（Mongoven 2003, Gill and Lowes 2008）などに適用される。他方で、日本においては、特に東日本大震災後に引用が目立つ。Dの平和性に着目した、東日本大震災後の社会の再構築に係る議論（中沢・内田2012 安藤2011）や経営学分野での応用研究（小門2014）、山本（2010）などによる地域福祉に関わるものがあげられる。他方でDの暴力性に着目した仁平（2011）は、ボランティアによる慈善行為という贈与が、被支援者に「負債感情を与え、自立心を根こそぎにするコミュニケーション」として作用する反贈与的な性質があることを、障害者運動などを事例に議論している。

紙面の関係で、それぞれの論文および他の関連研究群には触れることはできないが、『贈与論』を継承あるいは意識した研究群の層は、非常に厚いことが理解されよう。

3 開発援助・開発諸学における贈与交換の位置づけ： 全体的議論の部分的適用

それでは、開発援助および途上国の開発現象を扱う学問においては、贈与交換は現在までどのような位置づけであったのだろうか。以下のカテゴリーに分けて整理していく。

3-1 援助用語としての「贈与」および「贈与のパラドックス」をめぐる議論

日本のODA（政府開発援助）において、「贈与（グラント）」という言葉は「開発途上国・地域に対して無償で提供される協力」という特定の意味で用いられる。そして、表1にあるように、将来途上国が返済することを

前提とした「政府貸し付け等」と対比的な、援助の形態を表す言葉として使われる。「贈与」の種類としては、「無償資金協力」と「技術協力」が、「ローン（貸し付け）」としては「円借款」及び「海外投融資」があると説明される（外務省HPより）。日本のODAは、ローンの部分が、贈与部分よりも大きいことが特徴である。

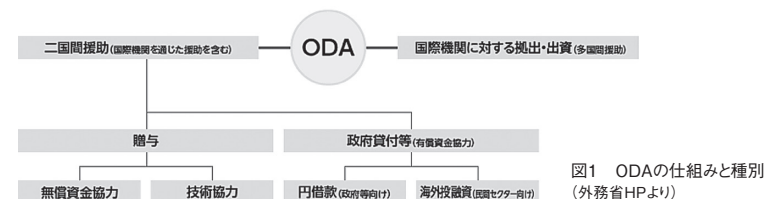


図1 ODAの仕組みと種類
(外務省HPより)

贈与という援助現象が国家間や組織間のやりとりであることに影響されてか、現象をめぐる開発研究は、国際関係学や国際政治学に傾斜し、テーマも「贈与のパラドックス（限定交換における贈与が実は、受け手にとって「非常に高くつくこと」）に集中する。つまり表1のDの「暴力性」に焦点があった議論である。まず、明示的に贈与交換論を引用し論旨を展開する論文がHattori（2001, 2003）である。ここでは、欧米ドナーがグラント（無償資金援助）として提供する開発援助が、レシピエント（援助を受ける）側に過大な返礼への義務感を負わせ、結果としてドナー側が意思決定において優位な立ち位置を助長しているとする（同上）。Kapoor（2008）は、現在の贈与という援助の形態の実態が、実はGiftではなくGrift（搾取）と呼ぶにふさわしいと断言する。また、同じような議論に、マーシャルプランを対象にした、Dillon（2003）の研究などがある。そしてこれらをまとめ、援助総額における貸し付けの割合が多いことで批判される日本の援助の意外な利点を示しているのが、Fukuda-Parr&Shiga（2016）となる。

3-2 互惠性・互酬性に関連する議論

対照的に、このカテゴリーは、表1のDの平和性（互惠性・互酬性）の議論へ傾斜した、経済学・社会学・人類学の議論である。ここでの議論は贈与という援助の形態とは無関係に展開され、どちらかという「オール

タナティブな開発」や「コミュニティ開発のあり方」に関係する、事例研究および実証研究が目立つ。傾向としてはDの贈与交換の「平和性」にあたる、互惠性・互酬性に関する議論を展開している。まず、事例研究としては、フェア・トレードなど、連帯経済や倫理的経済にかかる議論（佐藤2011）、あるいはコミュニティ開発に関わる議論（関根2015）などがある。これらの研究は、人々や組織の間のやりとりにおける関係性および好循環の回復に関わることを扱う特徴を持つ。実証研究ベースでは、世界開発白書2015 “Mind, Society, and Behavior”における、個人の行動変容に係るミクロ経済学の実証研究において引用が見られることが確認される（Michael and Neckenmann 2011 など）。基本的に互惠性が貧困層の行動変容の誘導に有益であることが論じられている。この研究群の特徴は、3-1とは逆に事例が概ね一般交換を対象にしていることにある。

3-3 暗黙の了解としての交換

最後に交換という現象の扱いについて考えたい。交換という言葉は、開発援助においては、贈与のように開発援助用語としては使われず、「二カ国間の文書の交換」や「ODA大綱見直しのための意見交換会」など、一般的な語法において使用される。しかし、冒頭でも問題提起をしたが、特に図1での技術協力を行う手段としての「開発プロジェクト（以下、プロジェクト）」は、実は交換のロジックで管理されている。

プロジェクトは途上国の特定地域において、2-3年と時間が限定されたサイクルの中で動いていき、そこでは、計画・実行・評価という流れで物事が進んでいくことが暗黙の了解になっている。そのサイクルに管理ツールとして埋め込まれているのが、「ログフレーム」である。経営学的手法であり、1960年代末にアメリカ合衆国国際開発庁がツールとして採用、1990年代以降は多くの開発援助機関において、結果重視マネジメントの流れの中、ログフレームで計画・実施・モニタリング・評価まで一貫して管理するようになった（鈴木2008）。

表1にあるように、ログフレームは、プロジェクト計画の概念的構成を一枚の表にまとめた概要表である。プロジェクトの目標、成果、活動、投入、リスクなどの情報が4×4のマトリックスに記載されるものである³。

表1にあるように、複数の活動を投入することがアウトプットを呼び、その積み上げがアウトカムを達成させ、インパクトに繋がるという構造である（JICA2015）。インプットとアウトプットの積み上げで成り立つ単純構造を持つ⁴。

表2 ログフレームの一般的な構成（JICA 2015, p12）

要約	指標	指標入手手段	外部条件
上位目標 (インパクト) 長期的な開発効果	上位目標の達成度を測る基準	上位目標指標の情報源	プロジェクトによる効果が持続していくための条件
プロジェクト目標 (アウトカム) プロジェクトの直接的な便益	プロジェクト目標の達成度を測る基準	プロジェクト目標指標の情報源	上位目標達成に必要な外部条件
アウトプット プロジェクトが生み出す財とサービス	アウトプットの産出状況を図る基準	アウトプット指標の情報源	プロジェクト目標達成に必要な外部条件
活動 アウトプットを生み出すためのプロジェクトの活動	投入(インプット) アウトプット産出のための活動に用いられる資源		アウトプット産出に必要な外部条件 プロジェクト実施にあたる前提条件

つまり、ログフレームは「Aを入れるとA-が出てくる」というロジックを積み上げる仕組みになっている。このツールについて鈴木（2008）は、図2のようにログフレームに描かれた因果関係（経路1）は、プロジェクト要約の内容に相当する「意図された経路（インプット）」による「意図された望ましい効果（アウトプット）」に過ぎず、経路1以外の動きはほぼ捉えられないとする。

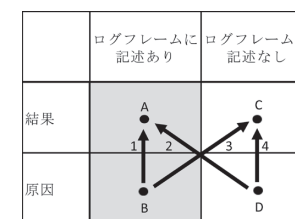


図2 プロジェクトの因果関係（鈴木2008, p46）

上述の二つの図や批判からもわかるように、人々の日々の暮らしの質の維持向上を目指すプロジェクトは、商品開発管理を扱うような単純なインプットとアウトプットの積み上げで成立し、モースの問題意識は全く共有されていないようである。「プロジェクトの成否やインパクト」などの説明枠組みに贈与交換論が援用される余地がないのかという疑問が湧く。

3-4 小括

この項では、開発援助および開発研究における贈与交換論の位置づけについて、表1Dの贈与の暴力性にかかる議論(3-1)、Dの贈与の平和性にかかる議論(3-2)、そして暗黙の了解としての交換原理(3-3)に分けて整理をした。全体的な議論であるはずの贈与交換論は、開発研究においては、それぞれの学術領域のバースペクティブに影響され、非常に限定的に使用されていること、あるいは開発援助の説明そのものに適用がされていないことが理解された。

4 贈与交換論と開発研究：研究の視座を整理する

それでは、「人と社会を動かす仕組み」である贈与交換論をどのように、より全体的な理論適用枠組みとして参照・活用できるのだろうか。あるいは、開発研究や開発援助から贈与交換論に新たな視座を提供することは可能なのだろうか。以下に、今後の研究の視座をまとめたい。

4-1 援助の返礼は何か：限定交換において

開発研究では「贈与のパラドックス」、国家間や組織間における限定交換の影の部分に焦点が当たっていた。しかし、贈与交換とは本来的に見れば、光と影の双方がある全体的な現象のほうである。例えば、同じ国家間レベルでの研究でも、光の部分、例えば援助を受けた国が、抛出国に緊急時に支援を提供する傾向があることが定量的に証明されれば、開発援助の「国際セーフティネット」としての機能が、納税者により広く証明できるのではないだろうか。

また、限定交換はミクロな側面、人と人、集団と集団においても行われる。例えば、筆者が過去に行った調査研究においても、開発援助業界に働く女性たちが、苛酷な業務を続けられる理由として「受け取るものがある」、つまり、生き方を左右する深い感情を与えてくれる存在として、途上国社会と人々が捉えられている(佐藤 2015)。また、青年海外協力隊経験者のインタビューからも同様の語りが見られる(佐藤・上山 Forthcoming)。このように、「支援する側」と「支援される側」に別れたやりとりであるが、

「与える」立場にいるはずの国際協力に関わる人々が、相手からも多くの(見える・見えない)ものを受け取っていることが分かる。このような研究を積み上げていけば「贈与のパラドックス」だけではない、「開発援助における返礼」の形を明らかにすることができ、国際協力の十分に語られてこなかった側面も可視化できるのではないか。

4-2 援助でやりとりされているものは何か：一般交換において

次に一般交換について考えたい。まず、開発援助、特に具体的な事業であるプロジェクトは、上述のように事前に投入と成果が計画・計算された、等価交換あるいは「投資」のロジックで組み立てられている。しかし開発援助とは、国家間の関係においても、実際のプロジェクト・チームにおいても、日々の人々との関わりにおいても、そして人々と人々の間の関わりにおいても、基本的には「やりとり」を通じて、良好な社会関係を生み出すことを志向する行為のほうである。そこでやりとりされるのは、「ある程度見えるもの(機材・技術・活動)」だけでなく、それを媒介とした感情や人間関係であろう。つまり、開発プロジェクトとは、物品供与や技術支援を媒介にした、感情のやりとりの具体的な場所といえよう。そうであれば、プロジェクトの理想形の一方は、そこに良好な感情と人間関係の構築、いわゆる社会関係資本を涵養・構築し、もって集団としてのパフォーマンス向上がなされ、想定していた目的、あるいは想定外の目的が達成されることでもあろう。そして逆に、開発援助という外部からの介入により、予期せぬ「悪循環」が生じる場合も同様にあろう。このことがどのように起きるかを解き明かすことは、図2における、経路1以外の動きを解き明かすヒントになるのではないだろうか。この分野の研究が蓄積され、一定のパターン認識が可能となれば、開発プロジェクトのより正確な評価ということに繋がろう。

次に、国家レベルにおける一般交換といえる、三角協力および南南協力について考えたい。三角協力とは、先進国が途上国Aを支援し、その知見を元に途上国Aが途上国Bを支援する形態の開発援助を指す。南南協力とは、このA国→B国への支援を指すと共に、多くの場合、かつて二国間の開発援助を受けた新興国が他の新興国・途上国に対して支援を行うことを

意味する。これはつまり、限定交換を超えて、開発援助が循環する現象といえ、理論的にも、そして主要先進国の開発援助への予算が目減りしているという意味で、現実的にも好ましい現象のはずである。どのような二国間（先進国→新興国・途上国）の開発援助が三角協力および南南協力を発展するのか、そしてそのことが先進国に意味することは何かを、丁寧に紐解くことは、転換期にある開発援助の未来予想図を描くためにも、意義が深いと言えよう。

4-3 やり繰り・やりとり・取り引き：人々の暮らしの重層的な理解に向けて

それでは次に、贈与交換の相対的な位置づけについて考えたい。2節で論じたように、やりとり（贈与交換）は、しばしば取り引き（等価交換）との対比の中で考えられてきた。しかし筆者の途上国での経験から鑑みると、その二項対立に置いてではなく、「やり繰り（概ね家計単位で完結する自給自足や節約行動）」という視点を足し、三点のあり方（補完拮抗関係など）において、途上国の人々やコミュニティでの暮らしぶりを理解する方が、より立体的な理解につながるという直感を持つ。特に自給自足的な暮らしを営む農村や「先住民・少数民族」が多く居住する地域においては、「取り引き（貨幣に換算できる消費生産能力）」のロジックで成り立つ経済指標だけで考えると「最貧困地域」ということになり、その社会の良い側面が見えない。よって、そのような地域に暮らす人々は「最貧困層」として表出化されやすい。他方で、そのような人々の「豊かさ」に目を向けるだけの開発研究も客観性に欠く。この3点のバランスがどのようになっているか、人々はその営みに価値を見出しているのか、そして決してやりとりされないものは何か。このような複層的な視座の「重ね書き」の中で開発援助をどのように提供することができるのかを深く考える研究が進み、特に開発プロジェクトを計画するための事前調査に組み入れられれば、より現地の状況に即した開発援助がデザインできよう。

5 結びに変えて

本論では、「社会の活性化の原理」について学際的に考察する「最古の開発研究の書」とも言えるモースの『贈与論』および関連研究群を、開発研究により豊かに活かすための視座およびアイディアの整理を行った。今後、理論・応用・適用の面において、まだまだ不明な点が多い贈与交換論についての理解を深めるとともに、開発援助の再評価・再構築の点において、活用の経路を探って行きたい。

参考文献

（日本語）

- 安藤礼二（2011）「物質と社会の再編成に向けて マルセル・モース『贈与論』（総特集 震災以後を生きるための50冊——〈3・11〉の思想のダイアグラム）——（故郷性）」、『現代思想』、39（9）：158-61。
- アンスバック、マルク（2012）『好循環と悪循環：相手も同じことをするという条件で』、新評論。
- 古市太郎（2015）「経済社会学に関する一考察—MAUSSによる「埋め込み」の受容と展開」、『早稲田社会科学総合研究』、第16巻第1号。
- 伊藤幹治（1995）『贈与交換の人類学』、筑摩書房。
- 今村仁司（2000）『交易する人間』、講談社。
- JICA2015、「JICA事業評価ハンドブック（Ver.1）」、独立行政法人国際協力機構評価部。
- 鈴木紀（2008）「プロジェクトからいかに学ぶか：民族誌による教訓抽出」、『国際開発研究』第17巻第2号、45-58頁。
- 岸上伸啓（2016）『贈与論再考：人間は何故他者に与えるのか』、臨川書店。
- 小門裕幸（2014）「インターネット革命黎明期のシリコンバレーにおける地域イノベーションの考察：贈与的交換が起きるシリコンバレーコミュニティの相貌」、『イノベーション・マネジメント』、法政大学。
- モース、マルセル（2014）『贈与論（初版1925）』、森山工訳、岩波文庫。
- 中沢新一（2009）『純粹な自然の贈与』、講談社学術文庫。
- 仁平典弘（2011）『「ボランティア」の誕生と終焉：〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』、名古屋大学出版会。
- 佐藤寛編（2011）『フェアトレードを学ぶ人のために』世界思想社。
- 佐藤峰（2013）「開発人類学を捉えなおす：マルセル・モースの『贈与論』に学ぶ」、国際開発学会「地域社会と開発」研究部会発表（於：東洋大学）、2013年6月25日。
- _____（2013）「感情を耕す人々：日系ブラジル人専門家の暗黙知を読み解く」、国際開発学会第24回全国大会論文集（於：大阪大学）。

_____ (2015) 「冷たい語り」を超えて：人類学者の感情の対象としてのODA人材」、関根久雄（編著）『実践と感情：開発人類学の新展開』、春風社。

_____ (2016) 「贈与」から見た開発援助：二人のモースからの示唆」、国際開発学会第16回春季大会発表論文集（於：立命館大学草津キャンパス）。

佐藤峰・上山美香（Forthcoming）「めげずに頑張り続ける力」はどこから来るのか：パネルデータおよびインタビューによる分析」、岡部恭宜（編著）『国際貢献と人材育成のあいだー青年海外協力隊の総合研究』、ミネルバ書房。

関根久雄（編著）『実践と感情：開発人類学の新展開』、春風社。

内田樹、中澤新一（2012）『日本の文脈』、角川書店。

山本馨（2010）『地域福祉政策実践のパラダイム比較——モースの贈与論の視角による社会学的理解』、ソシオロジ 55 (2): 89-105.

（英語）

Caplow, T.(1984) “Rule Enforcement Without Visible Means: Christmas Gift Giving in Middletown”, *The American Journal of Sociology*, Vol. 89, No. 6 (May, 1984), pp. 1306-1323.

Dillon, W. S. (2003) *Gifts and Nations*. New Brunswick: Transaction Publishers.

Duffy, J. and Puzzello, D. (2014) “Gift Exchange versus Monetary Exchange: Theory and Evidence”, *American Economic Review*, vol. 104, no. 6, June 2014, pp.1735-76.

Fukuda-Parr, S and Shiga, H. (2016) “Normative Framing of Development Cooperation: Japanese Bilateral Aid between the DAC and Southern Donors”, Working Paper 130, JICA-RI.

Gill, P. and Lowes, L. (2008) “Gift exchange and organ donation: Donor and recipient experiences of live related kidney transplantation”, *International Journal of Nursing Studies*, Volume 45, Issue 11, November 2008, pp. 1607-1617

Hattori, T. (2001) “Reconceptualizing Foreign Aid”. *Review of International Political Economy*, 8 (4), pp. 633-660.

Hattori, T. (2003) The Moral Politics of Foreign Aid. *Review of International Studies*(2), pp.229-247.

Kapoor, I. (2008) *Postcolonial Politics of Development*. London: Routledge

Mongoven, A. (2003) “Sharing our body and blood: organ donation and feminist critiques of sacrifice”, *Journal of Medicine and Philosophy*, 28, pp.89-114.

Sherry, J.(1983) “Gift Giving in Anthropological Perspective” in *The Journal of Consumer Research*, Vol. 10, No. 2 (Sep., 1983), pp. 157-168.

The World bank (2015) *World Development Report 2015: Mind, Society, and Behavior*, The World Bank.

ウェブサイト

外務省HP： http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/oda_keitai.html

註

1. 本稿では、国際協力という援助を提供する側の現象認識に基づく一般的に知られている言葉ではなく、開発援助という、より行為に関わる用語を使用する。
2. ログフレーム（プロジェクト・デザイン・マトリックス）とも言われる。実際のログフレームとは厳密には同一のものでないが、この論文ではログフレームで統一。
3. 現在使用されているログフレームにはより複雑なものもあるが、ここではJICAのプロジェクト評価に汎用的に使用されているマトリックスについて議論をする。
4. ログフレームは「概要表（スペック説明）」であり、それがそのまま「計画表（効果の予測）」になっていることに原始の誤りがあるが、ここでは触れない。
5. 岸上（2016）は、分配は贈与交換とはわけて考えるべきとする。この3点で捉えられない領域（分配・寄附・喜捨など）も考慮していく必要がある。

（都市イノベーション研究院・准教授）